

『治承物語』の藤原成親とその周辺 [上]

尾崎 勇

はじめに

原『平家物語』の『治承物語』は嘉応二年（一一七〇）から寿永・元暦・文治（一一八〇）あたりまでの世の動向を眼目にした「いくさ物語」である。『愚管抄』の同時代史を叙述していく際に、慈円は『治承物語』を取り込んだのであった。^[1]慈円が企画・創出させた『治承物語』では、嘉応二年の平資盛と執政の「臣」の松殿基房一行との鉢合わせをめぐる出来事を語っている。周知の通り史実では子の重盛の報復であったのを激怒した清盛と虚構して、平家の軍兵が基房の随身の髻を切り落としたのを聞き、「入道相国」「神妙ナリ」トソ宣ケル。（中略）摂政関白ノカ、ル御目ニ合セ給事、是ソ始ト承ル、」（屋代本・巻一「資盛朝臣殿下松殿乗合事」、以下『平家物語』の引用本文はことわらない限り、屋代本。）として、清盛の王法への悪行の始発として押し出した。承安二年（一一七二）二月、娘の徳子が高倉天皇の中宮となり、当天皇の実母である建春門院滋子が妻の時子の妹であったことも根拠となつて、やがて次の天皇の外祖父としての地位をねらう清盛の野望が物語では持続低音として鳴りはじめる。清盛をはじめとする平家一門の急速な権勢拡大のもつて、平家討伐をすすめる展開へと及んでいく。「鹿ヶ谷事件」である。これは『愚管抄』にもある。『愚管抄』の鹿ヶ谷の山荘で「マコトノ人」と礼讃されている静賢をもとに、静賢が物語に仕込まれる経緯を論じること筆者は、『愚管抄』の文章から『治承物語』にある「鹿ヶ谷事件」の一端の復元をすでに試みている。^[2]

最近、川合康は「鹿ヶ谷事件」は、治承・寿永の内乱が勃発する以前の『平家物語』前半の中心的テーマで

あり、「おごれる人も久しからず」の実例として、平清盛の権勢を物語る中核的説話であると理解されよう。」といい、研究史を整理して、

「鹿ヶ谷事件」譚は、まず『愚管抄』のような原初的形態で成立し、それが『平家物語』の説話群に発展していったと理解できるのではないだろうか。(中略)『愚管抄』の「鹿ヶ谷事件」譚が『平家物語』よりも完結した形態を示していたことに注目すれば、鎌倉時代初期に慈円周辺において成立したと考えるのが最も自然な理解ではないだろうか。⁽³⁾

との見解を呈示している。とするならば、『治承物語』に依拠して『愚管抄』を叙述したとした筆者の説とも繋ることになるであろう。⁽⁴⁾

現存の『平家物語』が語る藤原成親像を概括すれば、

当時左大将が欠員になり、藤原成親がその職を熱望したが、右大将重盛が左に移り、重盛の後任に宗盛が就いた。成親はこれを恨んで鹿ヶ谷の俊寛の山荘に一味を集めて平家討伐の密議をした。後白河院も参加していた。が、多田蔵人行綱の密告によって発覚する。そして成親らは清盛によって配流のすえに処断された。であった。

本稿では成親とその周辺を考察することを通じて、『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」をさらに具体的に復元していかうとするものである。

(一) キーパーソンとしての静賢

静賢は清盛からも信任されると同時に後白河院の懐刀でもあった。⁽⁵⁾ 静賢は思慮深い人であったからである。⁽⁶⁾ 人材であったことは『玉葉』寿永二年(一一八三)十月九日条に、

静賢法印来たり。世間の事等を談ず。頼朝使者を進らせ、忽に上洛すべからずと云々。(中略)又義仲等平

氏を逐はず、朝家を乱す、尤も奇怪、(中略)この外多く雑事を談ず。

とみえる。平家一門が都落ちした後、入京した木曾義仲は後白河院と対立し、当時の混乱した時局のもとで政治談義を記主の兼実としている。また平家が院を擁して北陸へ退去しよとするので、同年閏十月二十日条に「今日静賢法師院の御使となり、義仲の家に向ひ、……」とあり、危急の政治情況で懸命に奔走している院の近臣としての静賢が看取されようし、同月二十三日条に、

法皇南都に幸すべしと云々。疑ふらくは吉野に引き籠り給ふべきか。但し未だ一定ならずと云々。已の刻觀性法橋来たりて云はく、少将公衡大宮権亮能保(頼朝妹の夫なり)の縁(公衡は能保の妹の夫なり)に依り、頗る恐れをなすと云々。午の刻静賢法印来たり語りて云はく、去夜義仲院に参り、(中略)静賢又云はく、実にも院を具し奉るべき事は、必ずしも然るべからざる事か。事の理無く又その要無き事なり。只毎事忿怒をさざる間、若し北陸に逃げ籠るか、その時意趣を存する輩、武士と云ひ、院の近臣と云ひ、自ら怨みを報ずるか。然らば定めて物騒しきかと云々……

とみえている、後白河院も義仲排除の姿勢を明確にしたので、院の御所の法住寺殿を義仲は襲撃しようとするので、二重施線にあるように義仲に向つて毅然とした態度で静賢が苦言を呈したのであった。静賢の鬼才が際だつており、源平争乱の世でのキーパーソンであった。⁽⁷⁾

一方、『玉葉』の右文の施線で兼実邸に西山の往生院の院主である觀性も緊急の事態に怯えて来訪している事実が確認される。このことも『治承物語』が創出された空間の西山の壇越は、源頼朝と縁戚関係にある徳大寺家であったことによる(この觀性の狼狽のことは、別途に『治承物語』の徳大寺実定から復元する際に、徳大寺家は西山の壇越であったことあわせて論及したい)。慈円との交わりからは、『玉葉』建久二年(一一九二)七月三日条に「法印来らる。^(慈円)又静賢法印来たる。」とみえ、西山の空間で『治承物語』を企画・創出させる十八年前に、

建久三年八月觀性法橋舊迹の西山往生院にまかりて如法経かくとて歌あまみて人々の許へ遣なかに殿下へ申、

静賢法印之許へつかはす

(中略)

法の花のこるにほひにをく露は昔はこふる涙なりけり

(五六七〇)

かへし

雲のうへにけふのみ雪を見さりせは世にふるかひもなき身ならまし

(五六七一)

とあつて、往生院の院主二世であつた観性が二年前に入寂しており、仏法が華やかに残る現今にながれる涙は我が師の観性を思慕する涙であつたと静賢に慈円は詠んだ。静賢は如法経に結縁しなかつたならば、わたしもこのように涙が落ちることはなかつたであらうと返歌した。静賢は天治元年(一二二四)に生誕し、建仁元年(一二〇一)までの生存が確認できるので、少なくとも七十八歳以上の長命を保つたことは確かであつて、慈円が四十七歳頃迄では生存していた静賢を、『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」の平家討伐の謀議場面に登場させたわけである。延慶本『平家物語』には、

其比静憲法印ト申ケル人ハ、故少納言入道信西ガ子息也。万事思知テ振舞人ニテ有ケレバ、平相国モ殊ニ用テ、世中ノ事共時々云合セラレケリ。法皇ノ御氣色モヨクテ、蓮華王院執行ニモナサレナンドシテ、天下ノ御政常ニ被_レ仰合ケルニ、「サテモ此事ハ、イカゞ有ベキ」ト法皇仰ノ有ケレバ、「此事努々々不レ可レ有ト覚候。今ハ人多承候ヌ。何ガシ候ベキ。只今天下ノ大事出来候ナ_レズ。我君ハ天照大神七十二代、太上法皇ノ尊号ニテ御坐候トイヘドモ、王法ノ代、末ニ成リ、清盛又朝家ニ盛也。其ト申ハ、君ノ御恩ナラズト云事ナシ。然而朝敵ヲ平ル事度々也。サレバ何ヲ以清盛ヲバ失ハセ給候ベキ」ト、無_レ所_レ憚被_レ申ケレバ、成親卿氣色替テ立レケルガ、(中略)瓶子ノ頸ヲ取テ入ニケリ。法皇モ興ニ入セ給テ、着座ノ人々モエミマゲテゾ咲ハレケル。静憲バカリゾ浅猿ト思テ、物モ宣ハズ、声ヲモ被_レ出ザリケル。

(二本・三二「成親卿人々語テ鹿谷ニ落合事」)

とあつて、静賢は(論述の都合から物語の「静憲」を、以下では「静賢」とする。)、二重施線にあるように「天下の一大

事になりましょう」と語っており、施線では酒宴での成親の猿楽の振る舞いにひとり唾然としてしていると語っている。治承四年（一一八〇）八月の頼朝挙兵へ及んでいく廟堂の腐敗すなわち王法の危殆を静賢の言動をもとに象徴化しており、本物語の重盛と同様の人物像が付与されている。⁽⁸⁾そのため『愚管抄』のなかで、この山荘の謀議を叙述して、

アマリ二平家ノ世ノマ、ナルヲウラムカニクムカ、叡慮ヲイカニ見ケルニカシテ、東山邊ニ鹿谷ト云所ニ
 静賢法印トテ、法勝寺ノ前執行、信西ガ子ノ法師アリケルハ、蓮花王院ノ執行ニテ深クメシツカヒケル。萬
 ノ事思ヒ知テ引イリツ、マコトノ人ニテアリケレバ、コレヲ又院モ平相國モ用テ、物ナド云アハセケルガ、
 イサ、カ山莊ヲツクリタリケル所へ、御幸ノナリケル。コノ閑所ニテ御幸ノ次ニ、成親・西光・俊寛
 ナド聚リテ、ヤウ／＼ノ議ヲシケルト云事ノ聞エケル。
 （巻五——二四四ページ）

として、慈円は静賢を粹で括ったように「マコトノ人」と礼讃した。施線部の当初ですべてに亘って通曉している人材にして身分不相応なところがなかったといい、後白河院からも清盛からも意見を求められる人材との人物評をしている。これは既述したように史実と同一の視座で把握しているものの、つづく二重施線では前掲した『治承物語』に語られている成親をはじめとする院の近臣達の言動を簡約化して、史論に慈円は組み込んだ。四位・五位どまりの諸大夫でも謙虚に振る舞う静賢を「マコトノ人」としたところに、物語の本文の撰取と史論としての論理と葛藤が介在しているといえよう。『愚管抄』付録の後半部の人材論で澆季末代の現今では「諸大夫家ニモツヤ／＼ト人モナキ也。」（巻七——三三三ページ）と慈円は慨嘆している。そのため別帖の同時代史では具体的な事象に則って「……近臣愚者モテナシ／＼シツ、世ハカタブキウスルナリ。」（巻四——一九九ページ）と諸大夫家の出身である院の近臣が跋扈することによって治世の破綻と難詰したのであった。

道理史観で物語の「鹿ヶ谷事件」を慈円は引き据えていこうとしている。要するに右文の二重施線には、『治承物語』が語っていたと思われる、ひとり静賢だけが「浅猿ト思テ、物モ宣ハズ、声ヲモ被レ出ザリケル」の言辞を捨象している。換言すれば、欠員になった左大将の職を熱望して叶わなかった成親が院も臨幸して平家討伐

の謀議を凝らす物語が『愚管抄』では対置されているわけである。

その後の「鹿ヶ谷事件」の展開を、物語と史論の『愚管抄』とを比較してみよう。

「鹿ヶ谷事件」の山荘の謀議は発覚した。成親が清盛に捕縛された場面を『愚管抄』では「重盛モ思モヨラデアキレナガラ、コメタル部屋ノモトニユキテ、コシウトノムツビニヤ、「コノタビモ御命バカリノ事ハ申候ハンズルゾ」ト云ケリ。」(巻五——二四五ページ)とある。施線で成親が清盛の嫡子の重盛に「この度も」助命嘆願したのは、「鹿ヶ谷事件」より二十年近く遡る平治の乱の際に、成親の同母妹は重盛の妻であったことにもよって、藤原信頼に与して成親は捕らえられたときに「すでに死罪に定りけるを、左衛門佐重盛、「今度の重盛が勲功の賞には、越後中将を申あづかり候はん」と、たりふし申されたりければ、死罪をば申なだめられてけり。」(九条家本『平治物語』中・「信頼降参の事并最後の事」とある話柄が踏まえられていよう。そのことは、平治の乱で補縛された成親を『愚管抄』の方で、

成親中将ト二人ヲグシテ前ヘ引スヘタリケルニ、(中略)成親ハ家成中納言ガ子ニテ、フヨウノ若殿上人ニテアリケルガ、信頼ニグセラレテアリケル。フカ、ルベキ者ナラネバトガモイトナカリケリ。

(巻五——二三六ページ)

あり、若年の成親は乱に深く関与していなかったしている。また元木泰雄によれば「武門の中心重盛と、後白河院最大の寵臣との連携は、(中略)後白河は、平治の乱やその後の政争で失った腹心を、再び獲得したことになる。この結果、後白河は時として彼の独裁を掣肘する平清盛に頼らずとも、院政の維持が可能となったのである。この両勢力の亀裂が、緊密な提携関係にあったはずの後白河と清盛との関係を引き裂き、ついには鹿ヶ谷事件をもたらすことにもなる。(中略)重盛に対抗しようとする宗盛や時子らの意図も窺える。王権と人事をめぐって、後白河と清盛とは事実上、政治的に決裂するに至った。」⁽⁹⁾としている。この観点をもとにするとき、時子と清盛とのあいだに生まれた宗盛そして徳子が中宮になることで平家の中樞の人物になり、重盛とは拮抗していくの当然となってくる。重盛の生母は右近将監高階基章の女で、宗盛以下の兄弟とが異母兄弟になってしまう。時子と結

縁関係にない重盛の立場が動揺して焦燥する日々を迎えた。しかも仁安三年（一一六八）十二月には病に罹って権大納言を辞し、復任するものの、その二年後の嘉応二年（一一七〇）七月三日に惹起したのが殿下乗合事件であり、心身とも疲弊しているので見境がなくなり、神経質になって、時の政治体制のシンボルである高倉天皇や時子系統の平家一門に対する反発が湧出したのであった。¹⁰ 清盛と後白河院との対立・抗争が激化し始めて居る頃であった（後述）。頼朝挙兵へと展開させていく『治承物語』は、専横な振る舞いが目立つ清盛を際立てる一齣を創ったのである。この物語を対置して史実にも則って『愚管抄』では、周知のように、

父入道ガ教ニハアラデ、不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ。子ニテ資盛トテアリシヨバ、基家中納言増ニシテアリシ。サテ持明院ノ三位中将トゾ申シ。ソレガムゲニワカ、リシ時、松殿ノ撰籙臣ニテ御出アリケルニ、忍ビタルアリキヲシテアシクイキアヒテ、ウタレテ車ノ簾切レナドシタル事ノアリシヲ、フカクネタク思テ、関白嘉應二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駆ノ髻ヲ切テシナリ。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議アリシカド世ニ沙汰モナシ。次ノ日ヨリ又松殿モ出仕ウチシテアラレケリ。コノフシギコノ後ノチノ事トモノ始ニテアリケルニコソ。

（巻五——二四六〜四七ページ）

と慈円は叙述した。施線で「不可思議」・「コノフシギ」と繰り返し返すからには、やはり物語との葛藤があるとしなければなるまい。波線部では、『今鏡』が語り終えた後の「世継物語」である『治承物語』を念頭に置いた注記である。¹¹『玉葉』等の第一史料から物語の重盛はみえてこない。『愚管抄』での殿下乗合事件をめぐる事象から物語の「鹿ヶ谷事件」が端的に割り出される。とするならば、静賢を『治承物語』に組み入れることがあつてはじめて重盛像の造型すすんでいったともいえよう。とするならば、藤原成親が欠員になった左大将の職を熱望し、任じられなかった腹いせに鹿ヶ谷の山荘で一味を集めて平家討伐の謀議をしたのも、物語の「殿下乗合」と連動しており、史実ではないことになろう。

後白河院も参加していた俊寛の山荘で平家討伐の謀議の場で「天下の一大事になりましょう」と語る静賢は、

『治承物語』に於いて「オゴレル」清盛を鮮明にする平家一門で只一人の誠実・温厚な人物となっていく重盛を雛型の人物である。

『愚管抄』で「マコトノ人」と評された静賢は、物語全体の関わりから理想的な人間としての重盛造形のプレ人物であった。

(二)「コレハ一定ノ説ハシラネドモ」をめぐって

平家討伐の謀議を多田藏人行綱が密告する場面が『愚管抄』にある。すなわち、

コレハ一定ノ説ハ知ネドモ、満仲ガ末孫ニ多田藏人行綱ト云シ者ヲ召テ、「用意シテ候ヘ」トテ白シルシノ料ニ、宇治布三十段タビタリケルヲ持テ、平相國ハ世ノ事シオホセタリト思ヒテ出家シテ、摂津国ノ福原ト云所ニ常ニハアリケル。ソレヘモテ行テ、「カヽル事コソ候ヘ」ト告ケレバ、ソノ返事ヲバイハデ、布バカリヲバトリテツボニテ焼捨テ後、京ニ上リテ安元三年六月二日カトヨ、西光法師ヲヨビトリテ、八條ノ堂ニテヤ行ニカケテヒシクト問ケレバ、皆オチニケリ。白状カヽセテ判セサセテ、ヤガテ朱雀ノ大路ニ引イデヽ頸切テケリ。

(巻四——二四四〜四五ページ)

である。施線の「満仲ガ末孫ニ多田藏人行綱ト云シ者」には、行綱の遠祖である源満仲が安和二年(九六九)三月に安和の変に於いて密告したことがイメーじされ、当該の物語の「鹿ヶ谷事件」に対応する一連の『愚管抄』の記事群には歌人としての慈円の姿勢が看取できる。このことは後述するとして、まず「コレハ一定ノ説ハシラネドモ」の注記をめぐってみていこう。中島悦次の『愚管抄全註解』(有精堂)では「一定ノ説」のみを「釈注」の項に取上げて「たしかな説」としているので「たしかな説は知らないが」となろうし、大隅和雄の『愚管抄 全現代語訳』(講談社)では「このことについて確実なことは知らないが」としている。『愚管抄』では清盛の横暴

による遷都・南都焼亡等の王法と仏法の危殆を詳述したあと、治承四年（一一八〇）八月の頼朝挙兵をめぐる事象を布置する。まず、

伊豆國二義朝方子頼朝兵衛佐トテアリシハ、世ノ事ヲフカク思テアリケリ。平治ノ乱二十三ニテ兵衛佐トテアリケルヲ、……

（巻五——二五一ページ）

として、施線で現今の「世」を深慮遠謀している頼朝を押し出し、つづけて平治の乱で伊豆に配流された頼末を摘記したあと、

物ハ始終ハ有^レ興^レ不^レ思^レ議ナリ。其時モカハル又打カヘシテ世ノヌシトナルベキ者ナリケレバニヤ、頼盛ヲモフカクタノミタル氣色ニテ有ケルナリケリ。コノ頼朝、コノ宮ノ宣旨ト云物ヲモテ来リケルヲ見テ、「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心オコリニケリ。又光能卿院ノ御氣色ヲミテ、文覚トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆ニ流サレタル上人アリキ。ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトカヤ。但コレハヒガ事ナリ。文覚・上覚・千覚トテグシテアルヒジリ流サレタルケル中、四年同ジ伊豆國ニテ朝夕ニ頼朝ニ馴タリケル、ソノ文覚、サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ。

（巻五——二五一〜二五二ページ）

とある。施線部で、以仁王の令旨を受け取った頼朝に「思つていたとおりだ」と述懐させて「心オコリニケリ」すなわち挙兵を決断したと慈円は叙述したのである。前掲の深慮遠謀している頼朝をめぐる施線の「世ノ事ヲフカク思テアリケリ」としている言辞と以仁王の令旨を受け取った時の「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」との頼朝の言辞とは照応している。頼朝が道理史観に則つて、史論の正面に据え始められたわけである。つづく二重施線部では現存『平家物語』にも語られているように、後白河院の近臣である光能が文覚にとつては旧知であったので、光能を通じて院から治承四年（一一八〇）七月六日付の院宣を貰いうけて、頼朝に届けたとするのを「有ケルトカヤ」と量かした。それは『治承物語』に創られている挙兵は虚偽であるとの慈円の破線部に

基づく。この注記をうけて、承安三年（一一七三）五月より四年間伊豆に配流されていた文覚が頼朝と慣れ親しみ、「上下ノ御ノ内」すなわち後白河院や平清盛の横暴の廟堂の内情を探って、文覚が頼朝の挙兵を決意させたのが史実であるとのやはり注記なのである。道理史観に則って慈円は、説論したわけであった。そのため右文の冒頭の波線部「物ノ始終ハ有レ興不思議ナリ」は、前掲した殿下乗合事件をめぐって「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始メテ有ケニコソ」の言辞の延長線上にあることになろう。すなわち『愚管抄』はあくまで史論であって、仕組まれている頼朝挙兵をめぐる『治承物語』とは相違するのは当然である。頼朝挙兵をめぐる当該箇所も物語を対置して破線で「コレハヒガ事ナリ」と慈円は注記したわけである。とはいえ、「世ノヌシ」になる頼朝が本筋に据えられていく『愚管抄』と、『治承物語』に於いては平家一門と争い、壇ノ浦の海戦で一門を族滅させ、將軍にせり上げる頼朝とは同質であった。したがって方法では史論と物語では同一であり、この注記は自ら企画・創出させた『治承物語』を慈円は念頭に置いている証憑といえよう。

(三)『愚管抄』の「句」から「今ノ近衛入道殿下ノ御事也」へ

『愚管抄』巻一の冒頭には「漢家年代」が配されており、古代中国の君主の盤古・三皇・五帝・三王より北宋・南宋の寧宗までを列挙、つづけて初代神武天皇から五十代桓武天皇で巻一は括られる。巻二は五十一代平城天皇より八十四代後堀河天皇を以て巻二は括られる「皇帝年代記」となっている。つづく巻三から巻六までの「別帖」では、初代より八十四代順徳天皇が在位している承久元年（一一一九）の世までの「サダメナキ道理」（巻三——一三二ページ）を跡づける。特に慈円が生誕した前年の勃発した保元の乱からの「武者ノ世」に熱い思いを籠めるのである。

『平家物語』の構成を論じた美濃部重克は「『愚管抄』に示される王法観に近い。王法創始の時における天照大神と天児屋根命の約諾という王権と摂籙権の一種の神授説に王法の根拠を求めようとする王法観をその根本の

解釈原理としていわれる。「平家物語」にあつては解釈がプロットを作っている。そしてプロットは歴史と物語を合体させるテキスト構成上の単位であり、平家滅亡の因縁についての解釈とその経緯の叙述に物語的なかたちを与えるものとなっているのである。(中略)「平家物語」を成立させているプロットの基本のかたちを、鹿谷のプロットは形成している」との見解を披瀝した。^[12]『治承物語』を企画して創出させた慈円が、この『治承物語』を自家葉籠中のものとして『愚管抄』に取用される。山下宏明は『平家物語』の古態論は主題論にかかわる課題であり、集合して相当量まとまった概念を「マッス」(元来は美術用語)にあてはめると作品を構成する個々の物語る「かたまり」はプロットを有して、それは「句」のことでもあると論じている。^[13]平曲では各章を「句」という。『愚管抄』をみていくならば、巻四で「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。コノ次第ノコトハリヲ、コレハセンニ思テカキヲキ侍ルナリ。」(巻四——二〇六ページ)と揚言した慈円は、「武者」の動きを詳細に見据え始める。源頼朝から窺うと、保元の乱で勝利した後白河天皇は第一皇子の守仁親王に譲位して院政を開始し、近臣政治を強めていくと、守仁親王すなわち即位した二条天皇のもとにも当天皇の生母の兄である藤原経宗と当天皇の乳母子の藤原惟方を中心とする側近中の側近のもとで、院政に対抗する。天皇親政を企図する経宗・惟方に、院の近臣の藤原成親もくわわった。鳥羽院の本意は二条天皇を即させることで、後白河天皇には暫定的に位を与えられたに過ぎなかった。成親の父の家成は鳥羽院の近臣であつたことにより、五歳で叙爵し、その後は越前守・讃岐守・侍従・左近衛少将・右近衛少将と昇進をつづけたからであつた。そのため平治の乱では、平治の乱で源義朝と結託した藤原信頼の与し成親は解官されることになった。『愚管抄』に、

清盛ハ一家ノ者トモアツメテ、六原ノウシロニ清水アル所ニ平バリウチテヨリ居タリケル所へ、成親中將ト二人ヲ具シテ前ヘ引スヘタリケルニ、信頼ガアヤマタヌヨシ云ケル、ヨニくワロク聞ヘケリ。カウ程ノ事ニサ云バヤハ叶フベキ。清盛ハナンデウト顔ヲフリケレバ、心エテ引タテテ六條河原ニテヤガテ頸キリテケリ。成親ハ家成中納言ガ子ニテ、フヤウノ若殿上人ニテ有ケルガ、信頼ニグセラレテアリケル。フカ、ル

ベキ者ナラネバ、トガモイトナカリケリ。武士ドモ、何モく程々ノ刑罰ハ皆行ハレニケリ。

(巻五——三三六ページ)

とあり、施線で二十一歳の若年で何となく殿上人として信頼に付き従っていただけで罪に問われることはなかったと慈円は叙述した。これについては既述した。ところが、九条家本『平治物語』(中・「信頼降参の事并最後の事」)では「佐兵衛重盛、「今度の重盛の勲功の賞には、越前中将を申あづかり候はん」と、たりふし申されたりければ、死罪なだめられてけり。この成親は、院の御気色よき人にて、」と重盛の勲功に替えて死罪を免れ、後白河院の寵臣であったと語る。とすれば、『愚管抄』で「重盛モ思モヨラデアキレナガラ、コメタル部屋ノモトニユキテ、コシウトノムツビニヤ、「コノタビモ御命バカリノ事ハ申候ハンズルゾ」ト云ケリ。」(巻五——二四五ページ)とある施線には『平治物語』の「すでに死罪に定りけるを、左衛門佐重盛、「今度の重盛が勲功の賞には、越後中将を申あづかり候はん」と、……」が踏まえられているとも推定できそうである。また成親の妹が平重盛の妻であったので、乱から五年後の永万二年(一一六六)には左中将に昇進した。一方、信頼は二条天皇を引き入れて、除目を敢行した。そして、

サテ信頼ハカクシチラシテ大内ニ行幸ナシテ、二條院当今ニテヨハシマスヨトリマイラセテ、世ヲオコナイテ、院ヲ御書所ト云所ニスエマイラセテ、スデニ除目行ヒテ、義朝ハ四位シテ播磨守ニナリテ、子ノ頼朝十三ニナリケル、右兵衛佐ニナシナドシテ有ケルナリ。

(巻五——二二九ページ)

とあるように、義朝を播磨守にし、子の頼朝も二条天皇に仕える職を得て程なく初陣するわけである。このとき、『愚管抄』にはじめて頼朝が点描されている。その後、清盛との戦いに敗北して逃走して討たれるまでのことを、

サテ義朝ハ又馬ニモエノラズ、カチハダシニテ尾張國マデ落行テ、足モハレツカレタレバ、郎等鎌田次郎正清ガシウトニテ内海庄司平忠致トテ、大矢ノ左衛門ムネツネガ末孫ト云者ノ有ケル家ニウチタノミテ、カヽルユカリナレバ行ツキタリケル。待ヨロコブ由ニテイミジクイタハリツヽ、湯ワカシテアブサントシケルニ、

正清事ノケシキヲバサトリテ、コヽニテウタレナズヨト見テケレバ、「カナイ候ハジ。アシク候」ト云ケレバ、「サウナシ。皆存タリ。此顚ウテヨ」ト云ケレバ、正清主ノ顚打落テ、ヤガテ我身自害シテケリ。サテ義朝ガ顚ハトリテ京ヘマイラセテワタシテ、東ノ獄門ノアテノ木ニカケタリケル。ソノ顚ノカタハラニ歌ヲヨミテカキツケタリケルヲミレバ、

下ツケハ木ノ上ニコソナリニケレヨシトモミヘヌカケヅカサ哉

トナンヨメリケル。是ヲミル人カヤウノ歌ノ中ニ、コレ程一文字モアダナラヌ歌コソナケレトノ、シリケリ。九條ノ大相國伊通ノ公ゾカ、ル歌ヨミテ、オホクオトシ文ニカキナドシケルトゾ、時ノ人思ヒタリケル。

（巻五——三三七ページ）

と義朝の最期を委曲を尽くして慈円は叙述したのである。九条家本『平治物語』（中・「長田、義朝を討ち六波羅に馳せ参る事付れたり大路渡して獄門にかけられる事」）でも「……、左の獄門に樗の木にぞかけてける。いかなる者がしたりけん、元は下野守たりし事を歌により、札に書てぞ立たりける。」とあり、『愚管抄』と同一の落首を付して「源家おほくほろびけるこそふしぎなれ。」と語りおさめた。したがって施線の「ふしぎなれ」の「不思議」は、前掲した『愚管抄』で平治の乱で頼朝が伊豆に配流された顚末を摘記したあとに慈円が「物ノ始終ハ有^レ興^レ不思議ナリ」と繋がっている。史論でありながら、物語と同様の「句」とみなして差し支えない。

『愚管抄』は二条天皇が在位する治世で勃発した平治の乱で勝利した清盛の行動を正面に据えはじめる。「武者ノ世」の道理から清盛を叙述するわけである。当該の治世では治天の「君」が廟堂を領導するのが道理であった。が、二条天皇は親政を行なおうとするので後白河院との摩擦が惹起することになり、天皇と院との間で巧みに廟堂へ進出していく様子を「清盛ハヨクくツヽシミテイミジクハカラヒテ、アナタコナタ」（巻五——三三九ページ）と慈円は見事に捉えた。そして清盛が如何にして天皇家と外戚を築くかが『愚管抄』では解き明かされていく。自ずからプロットが『愚管抄』にはそなわっており、平治の乱の顚末と同様に精彩に富む場面や人物が躍動し、この部分もやはり、「清盛伝」と仮称できる「句」になっている。廟堂でときめいていく清盛をめぐって、まず、

永萬元年八月十七日ニ清盛ハ大納言ナリニケリ。

(巻五——二四一ページ)

と摘記する。天皇に近侍して国政に参画できる大納言の地位を得た清盛は、執政の「臣」の藤原基実の妻に我が娘の盛子を据えた。程なく内大臣になり、太政大臣へ清盛は上りつめる。「臣」であった基実が頓死したので、清盛に仕えている藤原邦綱の入れ知恵によつて、摂関家領の財産を清盛は継承した。その一方、後白河院の後の建春門院滋子は清盛の妻の時子の妹であつたので、子の重盛・宗盛も左右大将するとともに娘の徳子を高倉天皇の后にし、ついに徳子から言仁親王が誕生する。生後まもなく、親王宣下を受け、立太子した親王は三歳で即位する。安徳天皇である。そのことを『愚管抄』では、

イヨく帝ノ外祖ニテ世ヲ皆思フサマニトリテント思ヒケルニヤ、様々ノ祈ドモシテ有ケルニ、(中略)御懷妊トキコエテ、治承二年十一月十一日六波羅ニテ皇子誕生思ノ如クアリテ、思サマニ入道、帝ノ外祖ニ成ニケリ。

(巻五——二四三〜四四ページ)

としている。当該の「句」には清盛や平家一門への『治承物語』が語るような院の近臣等の反対勢力には言及されず、また清盛への筆誅を少しも慈円はくわえない。永万元年から治承二年(一一七八)の十三年に亘っている「清盛伝」として道理史観で結構されたわけである。物語の最初の「殿上闊討」に直結する「平家一門繁昌事」の章段でも「……保元々年七月ニ、主上、上皇、御代ヲ諍ハセ給シ時、安芸守トテ御方ニテ勲功アリキ」清盛は、平治の乱で勝利して「勲功一ツニアラス、恩賞是レ重カルヘシト」とされ、程なく「大納言ニ經上テ」、ついには「偏ニ執政ノ如シ」と評されるようになったと語り、「二天四海ヲ掌ノ内ニ拳リ給フ」と括っている。物語の本章段もやはり史論と同様に「清盛伝」と称して差し支えない。

次に『愚管抄』の「王法と仏法とが危殆に傾いている時局」の「句」をみていこう。まず、

安元三年七月廿九日ニ讃岐院ニ崇徳院ト云名ヲバ宣下セラレケリ。カヤウノ事ドモ怨霊ヲオソレタリケ

リ。ヤガテ成勝寺御八講、頼長左府二贈正一位太政大臣ノヨシ宣下ナドアリケリ。サテ又コノ年京中大焼亡ニテ、ソノ火大極殿二飛付テヤケケリ。コレニヨリテ改元、治承トアリケリ。

(巻五——二四六ページ)

とあつて、安元から治承に改元された理由が「句」の始発に据えられる。この文章を含めて、南都焼討ちの治承四年(一一八〇)十二月までの事象が羅列され、当該の「句」は括られた。編年体の形式が顕著になっており、編纂の歴史書の側面へ傾斜しているといえよう。以下には、

サテカウ程二世ノ中ノ又ナリユク事ハ、三條宮寺二七八日ヲハシマシケル間、諸國七道へ宮ノ宣トテ武士ヲ催サル、文ドモヲ、書チラカサレタリケルヲ、モテツギタリケルニ、伊豆國二頼義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、……

(巻五——二五一ページ)

との言辭が直結している。右文の施線は新たなる「句」への繋ぎの言辭となつていよう。源頼朝を正面に据え、道理史観から「王法と仏法とが危殆に傾している時局」を立て直していく経緯が叙述され始めた。そこで「王法と仏法とが危殆に傾している時局」の「句」をさらに細分して「段」にすることにしよう。そうすると、

- 1 安元三年(一一七七)七月二十九日、怨霊猖獗が信じられて崇徳院の追号と頼長への贈位のこと。
- 2 京の大火災によつて治承に改元されたこと。
- 3 清盛は後白河院の御所に行き、鹿ヶ谷の山荘で陰謀した西光との自白書をもとに、首謀者の処断をしたと告げたこと。
- 4 後白河院らの狼狽のこと。
- 5 治承三年(一一七九)八月一日、平重盛の没。重盛は立派な性格であつて、清盛の謀反を察知して早世を願つていたこと。

6 嘉応二年（一一七〇）十月二十一日、判断に苦しむことではあるが重盛は、子の資盛と「臣」の基房とが鉢合わせをしたときに、基房側から暴行を資盛がうけた腹いせに報復したこと。これが平家の悪行のはじまりであったこと。

7 華やいでいる「臣」の基房の人となりとその一族のこと。

8 治承三年六月十一日、平盛子が没し、同年八月一日に重盛の早世があつたので、重盛の領有している越前国、また盛子（「臣」であつた故基実の妻）の所有している摂関家領・文書とを後白河院は相続しようとしたこと。

9 治承三年十一月十九日、清盛は解官の除目、同月二十一日に任官の除目を断行。近衛基通を「臣」に就けて、右大臣九条兼実へ協力を求める。そのため十二歳の兼実の子を右大将に昇任させ、「臣」の基房を備前国へ配流し、後白河院を幽閉したこと。

10 治承四年（一一八〇）五月十五日、清盛によって配流されたことを知った以仁王は逃走したこと。

11 同月二十二日、源頼政が以仁王のもとに馳せ参じたこと。

12 同月二十五日、平家軍が押し寄せてきて、以仁王は自害し、頼政も討たれた。ところが、以仁王の生存のうわさがあったこと。

13 南都寺院などでは以仁王を迎える準備をしていたので、攻めようと清盛は企図したが、公卿が反対したと。

14 治承四年（一一八〇）六月二日、福原遷都、同年十一月二十四日には還都したこと。

15 同年十二月二十八日、平重衡が南都を焼討ちをしたこと。

となる。「段」の1には「讃岐院二崇徳院ト云名ヲバ宣下セラレケリ。カヤウノ事トモ怨霊ヲオソレタリケリ。」巻五——二四六ページとある。これを『愚管抄』付録で「平將軍ガ乱世ニ成サダマル謀叛ノ詮：（中略）：昔ヨリ怨

靈ト云物ノ世ヲウシナイ人ヲホロボス道理ノ一ツ侍ヲ、先仏神ニイノラルベキナリ。」(巻七——三三六—三七ページ)すなわち清盛の謀叛の「詮」すなわち要因は怨霊の仕業であり、「後白河一代アケクレ事ニアハセ給フコトナドハ、アラタニコノ怨霊モタゞ道理ヲウル方ノコタウル事ニテ侍ナリ。」(巻七——三三八ページ)とし、「コノ世ヲ猶ウシナハン邪魔ヲバ、神力・佛力ニテヲサヘ」(巻七——三四三ページ)と敷衍させている。編年の順序を逸脱させて怨霊猖獗する嘉応二年(一一七〇)十月から治承四年(一一八〇)十二月までの十三年に亘る清盛をはじめとする平家一門の横暴を内実とするのが「仏法と王法とが危殆に傾している時局」の「句」なのである。この怨霊論からみて、この全十五の「段」のなかで「段」の6が時間的に前後することになる。同時に『今鏡』が語り終えた嘉応二年(一一七〇)をうけている「世継物語」でもある『治承物語』では、「いくさ物語」を始発させたことを慈円は念頭に置いて『愚管抄』の当該の文章を叙述していることにもよる。¹⁴⁾それは嘉応二年の出来事として仕組まれた物語の「殿下乗合」を、「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。コノ松殿ハ攝録ノ後、……」(巻五——二四七ページ)とあつて、既述したように施線で「不思議」と慈円は史論の方では評し、平家の資盛が鷹狩りの帰途に執政の「臣」の松殿基房の参内に行き会い、下馬の礼をとらなかつたので基房の従者によって馬から引下されるという恥辱をうけたと叙述した。そして、これを聞いた清盛は烈火のごとく憤り、荒武者に命じて基房に乱暴狼藉をはたらせたとする『治承物語』に基づいて、史実では報復したのは重盛であつた注記としたからである。『愚管抄』の「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテ、……」の注記は、延慶本『平家物語』は「是ゾ平家ノ悪行ノ始ナル」(二本・一六「平家殿下ニ恥見セ奉ル事」)として「悪行」を断行した清盛を語っていく。が、諸本のうち屋代本では「大職冠淡海公ノ御事ハ中々不_レ及_レ申ニ、忠仁公、昭宣公ヨリ以来、摂政関白ノ力、ル御目ニ合セ給事、是ゾ始ト承ル」(第一「資盛朝臣殿下松殿乗合事」)としており、道理として藤原氏の祖より摂関政治が機能していった最初の執政の「臣」である忠仁公こと摂政の良房さらには昭宣公こと関白基経から把握している慈円の視座すなわち『愚管抄』に近く、慈円圏で創出している『治承物語』を取用したからであつた。周知のように「段」の6は重盛が企んだのを事件の張本人を清盛に置き換え、かえつて重盛には平家一門の横暴を

抑制する役目を果たさせている。「オゴレル」清盛を鮮明する人物像が造型されたのであった。「殿下乗合」の物語に続くのが左大將を熱望していた成親が様々な祈願をつづけるものの、その願いは叶えられぬとの託宣のあった「不思議」を語る。そして、「其比ノ叙位除目ト申ハ、賢王聖主之御計イニモアラス、摂政関白ノ御成敗ニモ不_レ及、一向平家ノマ、成リシカハ、」(第一「新大納言成親以下謀叛事」として、任官が叶わなかったことを恨んだ成親が後白河院をはじめ他の院の近臣と一緒に山荘で平家討伐の謀議を凝らし、清盛によって成親は処断されていくと展開させた。要するに「冥」と現実の政治世界すなわち「顕」とから「鹿ヶ谷事件」は物語に仕組み、王法の危殆を押し出した。したがって、『愚管抄』の「冥顕二法」の道理と相即することになる。

『治承物語』では「殿下乗合」の話柄に及ばせていくにあたって、

清盛力角心ノマ、二振舞事コソシカルヘカラネ、是モ只代ノ末ニ成テ王法ノ尽ヌル故ト思召ケレトモ、次ナケレハ御誠モ無リケリ。平家モ強ニ朝家ヲ可_レ奉_レ恨事モ無リシニ、世ノ乱レソメケル始ハ、嘉応二年十月十六日、小松殿次男新三位中将資盛、未_タ越前守トテ十三ニ成テ……

(巻一「後白河院御法体事」)

となっていたはずである。施線で清盛の横暴を王法の危殆として、二重施線は前掲した『愚管抄』の「コノフシガギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。」と同一の視座となっている。それ故、物語と史論とは構造が重なる。

次に『愚管抄』の撰閲家の動向を検討することを通じて、『治承物語』と六卷本との本文の異同と六卷本へ再編された時期の測定を試みることにしたい。

「王法と仏法とが危殆に傾いている時局」の「句」に於ける「段」の7の文章とは、

①コノ松殿ハ攝籙ノ後、年比ノ北方三條ノ内大臣公教ノ女ニムコトラレテ、ソノ子ドモ実房・実國ナド云人々ドモシテ杳トリ簾モタゲテ、法性寺殿ノ存日ヨリノ事ニテイミジカリケルヲ、花山大相國忠雅ムスメヲモチタリケル、攝籙ノ北政所ニナシタガリテ、ムコニトリ申テケリ。世間ノユ、シキ沙汰ニテ、最愛ノ中ニナリテ、師家ト云子ウミテ、八歳ニテ中納言ニナシテ、カ、ル事ドモ出キニケリ。ソノ後ハワザト、殿下御出ト

テアレバ実房ハ直衣ノ袖中門廊ノ妻戸ニサシ出スヤウニテ、無愛ニノミフルマヒケレバ、アレミヨナド人云ケリ。兼雅ハ又カハリテ、ソノタウコソハ家禮ハシケメ。アハレタゞ器量ト云モノ一コソ大切ナレ。

(巻五——二四七ページ)

である〔以下、論述の都合上、「臣」の基房に関する『愚管抄』の文章の冒頭に出現順に番号①・②・③……を付す。〕①の施線で基房の子の師家が八歳で中納言に就任したとしている。この事象は治承三年(一一七九)十月にあった。この時、清盛の娘の完子を妻にしている二十歳の近衛基通を飛びこえて昇進してしまったのである。この一ヶ月後に清盛はクーデターを断行することになる。このクーデターは、9の「段」であつて、

②入道福原ヨリ武者ダチテニハカニノボリテ、我身モ腹巻ハツサズナドキコエキ。カクシテ同キ治承三年十一月十九日二解官ノ除目、同廿一日二任官除目ト云モノヲ行ヒテ、コノ近衛殿ノ二位中将トテ年ハ二十二テアリシヲ、一ドニ内大臣ニナシテキ。重盛ガ内大臣關イマダナラザリシ所ナリ。サテヤガテ関白内覧臣ニナシテキ。

(巻五——二四八ページ)

とみえる。クーデターの一環として清盛は、強引に近衛基通を執政の「臣」に就ける。この間の経緯を九条兼実の日録に沿つてみておこう。すなわち『玉葉』治承三年(一一七九)十月九日条に、

関白の息師家、去夜従三位に叙す。今夜中納言に任ず。当時執政の息、左右の事無しと雖も、年齢八歳、古今例無し。今一兩年を経て任ぜられるると雖も、何の怨みやあらや。(中略)定めて鬱する所あるか。

とあり、その一ヶ月後の十一月十五日条には、

大夫史隆職注送して曰く、

関白藤基通、

内大臣同、

氏長者同、

関白を止む、

藤基房、

権中納言中将等を止む、

同師家。

……(中略)……

余この状を披見する処、天を仰ぎ地を伏し、猶以て信受せず。夢か夢にあらざるか。弁へ存ずる所無し。この事の由来は、法皇越前国を収公し(故人道内大臣の知行国、維盛朝臣これ伝ふ)、並びに白川殿の倉預を補せらる(前大舍人頭兼盛)。已上兩事、法皇の過怠と云々。三位中将師家、二位中将基通を超え、中納言に任ず。師家年僅に八歳、古今例無し。これ博陸(基房)の罪科なり。この外法皇と博陸と同意し、国政を乱らるる由、入道相国攀縁すと云々。然る間昨日の夕、禅門数千騎の随兵を率ゐて入洛の後、天下鼓動し、洛中の遽動、敢へて云ふべからず。

とみえているように、清盛によって「臣」を解任された基房は配流された政治情況を記主の兼実は、克明に刻み込んだ。『愚管抄』の「段」の9は「③ ヤガテ関白ヲバ備前國へ流ストモナク、邦綱ガ沙汰ニテクダシ申ケレバ、俄ニ鳥羽ニテ大原ノ本覚房ヨビテ出家セラレニケリ。」(巻五——二四八ページ)であり、二重施線で大隅和雄は「そして前関白(基房)をはつきり流すというわけでもなく、」と現代語訳したように、「……ナガストモナク、」は奥歯に物が挟まったような筆致であつて、万感こもこも胸に至る慈円の言辞といえようか。そこで基房配流の事を具体的にさらにみると、『玉葉』同年十一月十八日条には、

今夜又関白配流せらる。その間指したる沙汰無し。而るに官これを申し驚す。仍つて太宰権帥に任せらる。宣命ありと云々。

とあり、太宰府に配流になつた基房をいい、翌十九日条では、

前関白鳥羽の南辺に逗留せらると云々。

とあるので、洛中と西国方面とを結ぶ航路の起点の鳥羽に一旦は留められた。同月二十一日条には「前博陸今日

出家すと云々」とみえ、翌二十二日条では、

前関白、昨日出家入道す。大原の聖人(世に本覚房と謂ふ)戒を授け奉ると云々。今日下向せられ了んぬと云々。

(中略)これらの事を聞き、悲涙抑へ難きものなり。

とあるので、基房に対して記主の兼実は同情して落涙したのであった。同年十二月六日条には、

世間乱るる後、(中略)今夜法眼(道快)来らる。明日より祈り始むべき由、約束し了んぬ。

としており、今般のクーデターを懸念した兼実は弟の「道快」こと慈円に世の安寧のために修法を求め、翌七日条には、

今夜不動供を始む(一七ヶ日)、法性寺の座主^(慈円)これを修す。殊に祈願の事等あるなり。

とあって、兄の要請に応じて慈円は、加持祈祷を七日間に亘って修した。この「不動供」をし終えた慈円は、同月十八日条には「夜に入り法性寺の座主^(慈円)来らる。祈りの事を示し付く」とある。半年前の四月二日条には「法性寺座主道快来らる。千日堂に入り了り、(中略)大略世間の事益無し。」とあるので、千日入堂を完遂して名実ともに行者としての心魂がすわっている慈円は、兄の兼実から現今の政治の内情を聞かされて、ことに清盛にクーデターを直視しながら治世安寧の修法である「不動供」をしたのであった。

基房配流の事象は、本物語に、

関白殿ヲハ太宰帥ニ移奉テ、奉^レ流^ニ筑紫^一。カ、ラン世ニハトテモ合テモ有ナントテ、鳥羽ノ辺古河ト云所ニテ御出家有。御年三十五。礼儀ヨク知召、クモリナキ鏡ニテ渡ラセ給ツル物ヲトテ、世ノ惜奉ル事不^レ斜。遠流ノ人ノ出家シツルヲハ約束ノ国ヘハ遣ハサレヌ事ニテ有間、日向国ヘト聞ヘシカ、当時ハ備前国府トソ聞ヘサセ給ケル。

(卷三「入道相国奉恨朝家事同惡行事」)

と組み込まれている。施縁では基房は「明鏡」のようであったと讃えられていた。清盛がクーデターを敢行した時より四年後には上洛した義仲は後白河院を五条内裏に押し込めた場面に、

松殿禪定殿下ノ御智ニ押成テ、同廿七日、三条中納言知賢以下、卿上雲客四十九人カ官職ヲ止テ、奉^二追籠^一。平家ノ時ハ四十二カ官職ヲコソ止メタリシカ、是ハ四十九人ナレハ、平家ノ悪行ニハ猶越タリ。

(巻八「法住寺殿合戦」)

とあつて、寿永二年(一一八三)十一月二十一日に基房の三男の師家を執政の「臣」にした。この事柄につづけて、同月二十七日には解官したのは清盛の悪行よりも酷い暴挙であると義仲を物語では詰っている。この事象を『愚管抄』も叙述しており、

④サテ義仲ハ、松殿ノ子十二歳ナル中納言、八歳ニテ中納言ニナラレテ八歳ノ中納言ト云異名有シ人ヲ、ヤガテ内大臣ニ成シテ摂政長者ニナリ、又大臣ノ闕モナキニ、実定ノ内大臣ヲ暫トテカリテナシタレバ、世ニハカルノ大臣ト云異名又ツケテケリ。サテ松殿世ヲオコナハルベキニテ有リキ。サシモ平家ニウシナハレ給テシカバ、コノ時ダニモナド云心ニコソ。サテ除目オコナヒテ善政トヨボシクテ、俊経宰相ニナシナドシテアリシ程ニ、カヽル次第ナレバ、一ノ所ノ家領文書ハ松殿皆スベテサタセラルベキニテ、近衛殿ハホロ／＼成ナリヌルニテアリケレバ、法皇ノ近衛殿ヲイカニモ／＼イトヲシキ人ニ思ハセ給テ、賀陽院方ノ領ト云ハ、近衛殿ノテ、ノ中殿賀陽院ノ御子ニナリテツタヘ給ヘル方ナレバ、ソレバカリヨバ近衛殿ニユルサルベシヤト、ソノ世ニモ猶院ヨリ仰ラレタリケルヲ、シカルベカラヌヤウニ返事ヲ申サレタリケル、クチヲシクヲボシメシタリケル也。松殿ナンド程ノ人モ、カクテ木曾方世ニテ、世ヲナガクシランズトヨボシケルニヤト返^レ返^レクチヲシキ事也。九條殿ハウルセク、ソノ時トリイダサレズシテ松殿ニナリケルヨバ、事ガラモ十二歳ノヲモテ方コソアサマシケレド、松殿ノ返リナリタルニテコソアレ、イミジ／＼トテ、我レノガレタルヲバ^レ神ノタスケトヨロコバレケリ。

(巻五——二六一—六二ページ)

としている「臣」は近衛基通から義仲によって基房の子で十二歳の師家に移ったことで、清盛によって「臣」の地位を失われてしまっていた基房が政務を掌握し始めるとし、施線にあるように物語で「明鏡」とされた基房が

義仲政権のもとで返り咲く事象を叙述して、二重施線では慈円は暴政を敷く義仲と歩調を合わせた基房の政治行動を非常に悔やんでいる。そのことは『愚管抄』に、

⑤ 殿ハマチザイハイオボツカナク、當時ハウラ山シクモヤヲボシケン。人目ハヨクトシテ、サラレタルモヨシニテスギケルホドニ、中御門京極ニイツクニモマサリタルヤウナル家ツクリタテ、山水池水峨々タル事ニテメダクシテ、元久三年三月十三日トカヤニ、絶タル曲水ノ宴ヲオコナハントテ、鸚鵡坏ツクラセナドシテ、イミジクヨノ人モマチ悦テ、松殿ノムスメヲ北政所ニセラレタリ。攝籙ノヤガテ攝籙ノムコニナルモアリガタキ事ニテアリケレバ、サキノ入道殿下ヲ二人ナガラヲヤシウトニテモタレタレバ、公事ノミチ職者ノガキハメタル人ノ、昔ニスギタル詠歌ノ道ヲキハメテ、

(巻五——二八八～八九ページ)

とあって、⑤の二重施線の「殿」こと良経は「元久詩歌合」を企画した翌年に曲水の宴を復活する等、いろいろと有職故実に基房は精通していた。また施線にあるように基房の娘を妻にしていた。そのことは⑥ 良経モ左大臣、内大臣トテ、(中略) 松殿ノムスメヲ、サヤウニモイワレケレバ、次ノ年建仁元年十月三日ムカヘラレニケリ。年ハ廿八トキコヘキ。」(巻六——二八五～八六ページ)と叙述している。要するに実父の兼実と岳父の基房との薫陶よろしきを得て、豊かな才識のある九条良経を叙述してもいる。それ故、はかなく失脚するのが目睫にせまっている義仲政権に引き入れられてしまっている基房を④の二重施線では千載の痛恨事であったと慈円は慨嘆したのであった。

一方、『玉葉』寿永二年(一一八三)十一月二十一日条には、

昨日静賢法印又召しに依り院に参り、見参に入ると云々。又義仲内々示して云はく、世間の事松殿に申し合はせ、毎時沙汰を致すべしと云々。頗る静賢詳しからざるか。(中略) 余密々に祈請して云はく、今度義仲若し善政を行はば、余その仁に当る。この事極りなき不祥なり。仍つて今度の事、その中に入るべからず。義仲の順ふべからざる由、聊か仏神に謝したんぬ。言ふ莫れ言ふ莫れ。

とあり、『吉記』同日の条にも「天下庶勢入道関白殿御沙汰云々、」と同様に記載している。④の文章の波線部には、義仲政権は程なく潰えることを見越している兼実の賢慮を讃歎したのである。『玉葉』の右文の施線から静賢も当然ながら、この時局では既述したように「マコトノ人」と慈円が評した人物であったので、静観していたのであった。また物語には義仲のクーデターの際の除目を取り上げ、

其比松殿禅定殿下、木曾ヲ召テ仰ラレケルハ、「清盛ハ悪行タリシカトモ、希代ノ大善根ヲセシカハ、代ヲハ目出ク廿余年マテ持チタリシ也。悪行計リニテハ代ヲ持事ハ無物ヲ。被^レ追籠タル人々ノ官共ヲ、皆ユルセカシ」ト仰ケレハ、ヒタスラ荒夷ノ様ナレトモ随奉テ、追籠タル人々ノ官供皆^ナ奉^レ許シ。

(卷八「法住寺殿合戦」)

と語っている。義仲に、悪行を犯して治世を保つことは叶わないと基房は論したのも史実に則っている。⁽¹⁶⁾『愚管抄』の④の枠で括った「善政」に着目し、武久堅の「松殿父子を兼実も又同情すべき源平争乱期の受難者として、ある余裕をもって受け止めている。(中略) 松殿父子を語る『平家物語』の揺れの無い、優しい評価である。」との言説ならびに④の二重施線をもとに「平家物語の松殿もあの「殿下乗合」事件以降一貫してこの松殿観の上に叙述されていると解してよからう。」との言説に配意したならば、⁽¹⁷⁾後述するように大乘菩薩戒の教えから「おほけなく憂き世の民におほふ哉我が立つ袖に墨染めの袖」(四九九)と詠歌した慈円が、別所の念仏聖の蜃集する西山で企画して創出させた『治承物語』の本質と抵触してこよう。同時に『今鏡』を引き継ぐ、『愚管抄』に取り込んでいった慈円の叙述姿勢とも軌を一にしているであろう。

このようにみると、『愚管抄』の「段」の6で物語の「殿下乗合」を取用した箇所で「コノフシガギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。コノ松殿ハ攝籙ノ後、……」といい、「段」の9には清盛のクーデターで「ヤガテ関白ヲバ備前國ハ流ストモナク、……」としている文章は、四年後の義仲のクーデターまでが見事に繋がっている。「句」となっているからには、『愚管抄』にはプロットがあるといえよう。それは『愚管抄』付録の前半部すなわち別帖を引き継いで要約している、いわゆる「史」の論の文章に、

ヒシト武者ノ世ニナリシ也。ソノ後、攝籙二臣ト云者ノ、世中ニトリテ、三四番ニクダリタル威勢ニテ、キラモナク成ニシナリ。其後ワヅカニ松殿・九条殿コノ二人、イサ、カ一人ニ似タル事トモアレド、カク成ヌル上ノナサケニテコソアレ。松殿ハ平家ニウシナハレ（中略）近衛殿ト云父子ノ、家ニハムマレテ、職ニ居ナガラ、ツヤクトカイハライテ、世ノヤウモヲモ家ノナライヨモ、スベテシラズ、（中略）イマダウセズシナデヲハスニテ、ヒシト世ハ王臣ノ道ハウセハテヌルニテ侍ヨト、サハクトミユル也。

（巻七——三三五—三六ページ）

「武者ノ世」以降は執政の「臣」の威勢は衰微していったと批評したうえで、施線にあるように「松殿ハ平家ニウシナハレ」と摘記して、さらに嘉應二年の「殿下乗合」から義仲のクーデターまでの十三年が概観されてより、建仁元年（一一〇一）十月三日までの十八年の歳月を跡づける慈円の思念があるので、「王法と仏法とが危殆に頻している時局」の「句」で具現されていたのであった。さらに「史」の論では、現今末代では「臣」として基房（一一四五—一二三〇）・兼実（一一四九—一二〇七）とが人材として活躍していたが、二重施線で近衛家の基通（一一六〇—一二三三）と家実（一一七九—一二四二）の父子が「臣」として居座り、枠で括ったように「今」も生きながらえているので、君臣の道は破局を歩むと批評している。この「今」は看過できない（後述）。道理史観から、承久二年（一二二〇）頃の慈円の率直な所懐を披瀝し、君臣の道が破綻するにちがいないと危惧している。換言すれば、「臣」であつた兼実の寂後、建久七年（一一九六）から建仁二年（一二〇二）まで基通が「臣」であり、家実は建永元年（一二〇六）より「臣」でありつづけている。この実情をもとに「冥顯二法」の道理から聖徳太子の霊告どおり兼実に孫の九条道家が「臣」に就いて符合する時運をもとに、近衛家父子を指弾したのであった。「史」の論では、摂関家の三家を九条家・松殿基房家と近衛家とに白黒を明らかにしたわけである。

このように松殿基房を『愚管抄』の構成から鳥瞰したとき、「段」の9の「ヤガテ関白ヲバ備前國へ流ストモナク、……」とした言辞は、慈円の深い感慨であつたことになる。この基房と対照されている摂関家の近衛基通・家実父子に着目してみていくことにしよう。まず配流された基房に替わつて執政の「臣」になつた基通を、

これまでみてきている屋代本の文章では「故中殿御子二位中将基通トテ、入道ノ智ニテ坐シケルヲ、内大臣関白ニ成奉ル。」(巻三「入道相国奉恨朝家事同悪行事」)とだけであるが、延慶本は、

故中殿基実公御子二位中将殿基通ト申ハ、今ノ近衛入道殿下ノ御事也。其時大政入道ノ御智ニテオワシケルヲ、一度二内大臣関白ニ成奉ルト聞ユ。

(二本・二七「入道卿相雲客四十余人解官事」)

と、施線の一節が添えられている。出家した承元二年(一二〇八)七月五日以降から天福元年(一二三三)五月二十九日の期間に本物語の成立した証憑ともみなされる。が、現在の研究の大勢では否定的である。⁽¹⁹⁾施線の枠で括った「今ノ」の用例を検討した服部幸造は「近衛基通が出家入道した年から死んだ年までの間に書いたものは限定できず、たとえ基通死後であってもこのような表現をすることは可能ではないかと思われる。」⁽²⁰⁾といい、客観的事象として、ある距離を置いて傍観者的に「一つの世界を構築しようと試みたかの如くである。」と解釈している。⁽²¹⁾仁治改元頃(一二三九)には『愚管抄』を用いて六巻本『治承物語』に再編されたのであるから、この六巻本の延長線上にある延慶本の「今ノ」を付してもことさら疑義をたたす必要はないように筆者には思われる。そのことを『愚管抄』の文章にそくして窺うことにしよう。

『愚管抄』別帖では、平家一門の都落ちに同行しなかった執政の「臣」の基通に、後白河院はそのまま政務を担当をさせようとしたが、

近衛殿撰録モトノ如シト被^レ仰ニケリ。一定平氏ニグシテ落ベキ人ノトマリタレバニヤ。又イカナルヤウカアリケン。サレド近衛殿ハカヤウノ事申サタスベキ人ニモアラズ。スコシモヲボツカナキ事ハ右大臣二間ツハコソヲハシケレバ、タゞ名バカリノ事ニテ。庄園文書マ、母ノ我ヨリモ弟ナリシガ手ヨリエタル由ニテ、清盛ニカクシナサレタル人ニテアルガ、猶カクテアラハルハ、イカニモく人ハ心エヌコトニテアリシヲバ皆心エラレタリ。カウ程ニミダレン世ハ何事モイハレタル事ハアルマジキ時節ナルベシ。大方撰録臣ハジマリテ後コレ程ニ中用ナル器量ノ人ハイマダナシ。カクテコノ世ハウセヌル也。

として、施線で「右大臣」の九条兼実からの助言をうけたりしなければ政務を執行できないと基通その人の不明さを語り、二重施線でこれまでの「臣」のなかで基通は最も不器量であると酷評し、現今の世は破綻してしまっている。慈円は慨嘆している。「王法と仏法とが危殆に頻している時局」の「句」のなかの「段」であるから、「臣」に就いている基通から王法の危殆を取り出したといえよう。それにしても右文にある二重施線の基通への慈円の筆誅はきわめて烈しい。二重施線の二文と同様の筆誅は『愚管抄』付録にも、「近衛殿ナド云サタニホカノ者、(中略)平将軍ガ乱世ニ成サダマル謀反ノ詮ニ、二位ノ中将ヨリツヤツヤ物モシラヌ人ノワカクヲロカクトシタルニ、攝籙ノ臣ノ名バカリサツケラレテ、怨靈ニワザトモラレテ、ワガ家ウシナワンレウニ久シクイキタルゾト」(巻七——三三六ページ)とある。基通は二十歳にして執政の「臣」に就き、爾來、天福元年(一一三三)に没したときは七十四歳にあった。嘉祿元年(一二二五)に慈円が寂しているので、その八年後まで生存している。源平争乱の世から承久の乱へと半世紀に亘る激動の世の廟堂でのう、のうと羽振りを利かしつづける基通であるとの慈円の烈しい嫌惡の情が露呈している。そのため右文の波線で平家の怨靈が誑かし、二重施線にあるように摂関家を滅ぼすために生きながらえていると慈円は基通を酷評することにもなった。そのことを、その後さらに「……松殿・九条殿ノ事ニアハレヤウ、コノイ殿ノタビクトラレ給ヒテ、今マデ命ヲイケテアソビテコノ家ヲウシナハレヌル事ト、後白河一代アケクレ事ニアハセ給フコトナドハ、アラタニコノ怨靈モ……」(巻七——三三八ページ)として、基通がいままでも長生きしてのさばっているのは怨靈の仕業であると慈円が執拗に繰り返した。ここで留意したいのは、史論を叙述している「今」の承久二年(一二二〇)から、枠で括った一節の「今マデ命ヲイケテアソビテコノ家ヲウシナハレヌル事」の「今マデ」は、『愚管抄』の文章のなかでも一際目立っている。近衛基通批判に付随する「今マデ」の語彙は、熾烈な語感をともなっている。「今マデ」生きながらえているのは怨靈の仕業であると告発しており、『愚管抄』を披読した人は廟堂の秩序をみだす基通の存在に衝迫されて、「負」の基通すなわち指弾される基通が記憶されていくであろう。『愚管抄』を取用して『治承物語』が

六卷本へ再編されていく際に、『治承物語』にある「二位中将基通トテ、入道ノ智ニテ坐シケルヲ、内大臣関白ニ成奉ル」(屋代本)のような本文うえに、生きながらえている基通を告発する思念が重層して「今ノ近衛入道殿下ノ御事也」(延慶本)すなわち六卷本『治承物語』の本文となったとしなければなるまい。この「今」を屋代本と延慶本との比較して、さらにみていこう。

延慶本の「建礼門院法性寺ニテ終給事」(六末・二六)をみると、朝廷社会を領導している道家が住む法性寺へ移り、この度の王法が危殆に瀕した承久の乱を知り、往時の壇ノ浦海戦に際会して平家一門の族滅の惨事を実見、さらに自己自身の入水のことを想起した女院徳子は、大原の寂光院にいたならば「是程目ノ当リハ見聞ザラマシ」と述懐したとして、「責ノ事ト覺テ哀レナル。是ニ付キテモ、朝夕御行法不_レ怠、」とあるので仏法王法相依の理から延慶本は我が一門の靈魂を鎮護する女院徳子像が造型されている。だが、屋代本では安徳先帝を思つて千々に乱れる母親としての女院徳子が義父の後白河院と妹の「トフラフ」所業をうけながら、かろうじて往生する女院徳子を語っており、大原で語り出された女人往生譚が遺存している。²²⁾そのため屋代本では「忍ノ御幸成ケレ共、花山院、徳大寺、土御門以下ノ公卿六人、殿上人八人被レ参ケリ。」ときわめて簡素に語るが、延慶本の「法皇小原へ御幸成事」(六末・二五)では、

御共ニハ当関白殿、関院太政大臣、徳大寺左大臣、後徳大寺左大将実定、右大将実能、花山院大納言兼雅、按察大納言泰通、山井大納言実雅、冷泉大納言隆房、侍従大納言成通、桂大納言雅頼、堀川大納言通亮、花園中納言公氏、土御門宰相通親、梅津三位中将成方、唐橋三位、岡ノ屋源三位佐親、殿上人ニハ……

とあつて、王法の中樞の顯官を引き連れての盛儀をきわめた御幸となっており、文治二年(一一八六)当時の執政の「臣」は九条兼実であつたので、施線での「当関白殿」とは九条家の兼実を指していることになる。一方、院は「何計ノ御恨ヲ残サセ給ツラムトアサマシクコソ。サテモ誰事問マヒラスル人ニテ候ゾ」といい、さらに、「六条ノ摂政ノ方ヨリハ、申旨ハ候ハヌニヤ」と申サセ給へバ、「夫モ^{今ハ}絶ガチニコソ」ト被_レ仰テ、法皇毛女院モ供奉ノ人々モ、袂ヲシボリテゾ渡ラセ給ケル。

とあって、女院徳子の妹である完子を妻としている施縁での「臣」の近衛基通が来訪してくるのかと尋ねたところ、波線にあるように現今では途絶えていると女院徳子は返答したのである。院をはじめ同行した人々は酷い基通の仕打ちに対し、悲憤慷慨して思わず涙を流したとなっている。ここにも九条家と近衛家との対照が仕組まれており、波線の枠で括った「今ハ」には、現今では冷酷に振る舞う近衛基通を際立てようとしている物語の視座がある。波線部の枠の「今ハ」の捉え方では、前掲した「今ノ近衛入道殿下ノ御事也²³⁾」としていたのと同じの方法である。延慶本には近衛基通批判が介在しているからである。

基通が出家入道したのは承元二年（二〇八）七月五日である。したがって時間順序からは、承元四年あたりから創出しはじめている『治承物語』に取用されても不自然ではない。だが「今ノ近衛入道殿下ノ御事也」の言辞は、六卷本『治承物語』へ再編されたときに付されたのであった。²⁴⁾その理由として、別所の西山の慈円園で創出されている『治承物語』の表層に於いては怨霊を語ろうとはしないからである。²⁵⁾換言すれば、西山の慈円園は怨霊猖獗する圏外であったからである。

『愚管抄』を撰取して六卷本『治承物語』に再編されたときに『愚管抄』の「今マデ命ヲイケテアソビテコノ家ヲウシナハレヌル事」の論理から、「今ノ近衛入道殿下ノ御事也」との注記が施されたと思われる。

(四) 多田蔵人行綱の密告

清盛は治承三年（一一八〇）十一月にクーデターを敢行した。これによって執政の「臣」である松殿基房も配流された。そのことを物語は、

大臣流罪ノ例ハ、右大臣曾我赤兄、右大臣豊成、左大臣魚名、菅原右大臣、今ノ北野天神也、左大臣高明、内大臣藤原伊周公ニ至マテ其例六人。サレトモ忠仁公、照宣公ヨリ以来、摂政関白流罪ノ例是始トソ承ル。

（卷三「入道相国奉恨朝家事同悪行事」）

としており、先蹤の大臣の一人として二重施線にあるように「左大臣高明」を挙げている。村上天皇の皇子の為平親王は源高明の女と結婚していたので、立太子して即位でもすれば、外戚関係のもとに天皇の後見として源氏が政治の采配をふるうことになり、摂関政治の朝廷社会リードしてきた藤原摂関家にとっては不都合な事態に陥っていく。たしかに順序からいって為平親王が立太子になる状況であった。その折も折、源高明は謀反を企てていると源満仲が朝廷に密告した。そのため高明は太宰権帥として左遷され、やがて藤原師輔の娘の安子から生誕していた守平親王が即位することになった。第六十四代円融天皇である。これは平安時代中期の最大の疑獄事件であった。この安和の変を、『愚管抄』別帖の執政の「臣」として第六十六代一条天皇の在位している治世を領導している藤原道長を押し出すなかで、慈円は、

安和二年三月ノコロ、コノ左大臣高明謀反ノ心アリテ、ムコノ為平ヲトモヒケルナルベシ。冷泉院ホドナク御物ノ怪ニテ御葉シゲ、レバ、何トナクタチロキケルコロニヤ。左馬助源満仲、武蔵介藤善時ナド云、時ノ武士ノサ、ヤギ告ケルコト出来テ、三月廿六日ニ左大臣ハ左遷セラレテ、太宰権帥ニ成テナガサレケレバ、ヤガテ出家シテケリ。僧連茂・中務少輔橘敏延・左近衛門大尉源連・前相模介藤千晴ナド、遠流ニミナヲコナハレニケリトシルセルハ、此スチニ満仲ナンドモカタラハレケルニヤ、武士ニテユカリツ、カハレテ、推知シテツゲ申タリケルニヤ、カハルコト出キニケリ。

(巻四——一八〇ページ)

と概括している。二重施線で廟堂にかかわる「武士」をはじめて史論に明記し、施線で二度に亘り満仲に言及し、波線にあるよう満仲の密告を寸評しているのは看過できない。廟堂が動揺していくなかで頼朝が挙兵して平家一門と武力衝突をする「いくさ物語」が当該の文章の基底に慈円は介在させている。換言すれば、『新古今集』の代表的歌人である慈円は、『古来風躰抄』の「型」を襲用する「もとの心」の修辞や先行の物語を下敷にする「本説取り」の修辞を史論に反映させていることと連続していよう。それは、満仲の密告とその後の安和の変の顛末と多田蔵人行綱の密告によって平家討伐が発覚して成親等が流罪されていく物語すなわち『治承物語』の「鹿ケ

谷事件」の構造とが呼応しているからである。

安和二年（九六九）三月二十五日に源高明は太宰権帥に左遷された。一方、根拠地の摂津多田荘という溪谷の小盆地で構成されている武士の清和源氏の源満仲は、背信行為の密告によって、藤原摂関家と交わる端緒をつかんだ。程なく満仲は正五位下に昇進し、軍事貴族の第一人者の地位を確立した。摂津多田荘の一豪族でしかなかった清和源氏は、満仲の次の世代では摂津源氏・大和源氏・河内源氏と三家に分派し、摂津源氏の子孫が多田藏人行綱・頼政、河内源氏の子孫には為義・義朝そして頼朝が出現していくことになる。そのことを物語もふれている。すなわち、治承四年（一一八〇）五月に頼政が以仁王にひそかに勤めて、国々の源氏に、平家討伐の令旨を賜る場面を百二十句本（屋代本は欠巻）でみると、

津の国に多田の藏人行綱こそ候へども、新大納言の卿の謀叛のとき、同心しながら返り忠したる不当人ではへば、申すにおよばず。さりながらも、その弟に、多田の次郎知実、手島の冠者高頼、太田の太郎頼基、河内の国には、武蔵権守入道義基、子息石川判官代義兼。大和の国には、宇野の七郎親治が子ども、太郎有治、……（中略）木曾の冠者義仲。伊豆の国には、流人前の兵衛佐頼朝。（中略）陸奥の国には、故左馬頭義朝の末の子、九郎冠者義経。これみは六孫の苗裔、多田の満仲の後胤なり。

（巻四・「高倉の宮謀叛」）

と語られている。『源平盛衰記』では、

……御弟ノ染殿式部卿宮ハ、西宮ノ左大臣ノ御婿ニテオハシケルヲ、「能入ニテ渡ラセ給」ト申ケレハ、中務丞橘敏延・僧連茂・多田ノ満仲・千晴ナド寄合テ、式部卿宮ヲ取奉テ東国ヘ赴、軍兵ヲ起、即レ位進セント、右近ノ馬場ニテ夜々談儀シケル程ニ、満仲心替シテ此由ヲ奏聞シケルニ依テ西宮殿ハ被ニ流罪ニ給ニケリ。

（巻一六「満仲譏」西宮殿）

とあり、施線にあるように満仲は途中で心変わりして朝廷に密告したので高明は流罪になったと明確に捉らえている。二重施線から、安和の変より二百五十年の時空を横断させて把捉する視座があつた。このことから多田

蔵人行綱の密告に遠祖の源満仲の密告を歌人慈円の企画した『治承物語』に反映させることがあり得るであろう。多田蔵人行綱のその後の行実を史実に沿って付言しておこう。治承四年(一一八〇)五月に以仁王挙兵に名が見え、一ノ谷合戦で勲功を賜るものの文治元年(一一八五)八月には、多田荘を源頼朝は没収して行綱を追放してしまう。その理由の一つは、源満仲以来の源氏武門の本拠地で京と西国とを結ぶ多田荘は地理的・軍事的に重要であつたからであつた。⁽²⁶⁾二つ目としては、平氏に服属していた行綱は一ノ谷では義経と密接に提携したので、頼朝は義経との対立を深めていくなかで、行綱を忌避するとともに源氏の嫡流を自認するに至つたので、我が一門発祥の地の多田荘を手に入れることを必要と思つたからであつた。⁽²⁷⁾それより以降の行綱の行実は管見に入らない。この実相からも平家討伐する頼朝を主軸にしている物語に、行綱を組み入れることは十分に考えられる。

前掲したように行綱密告をめぐる、『愚管抄』に「コレハ一定ノ説ハシラネドモ、満仲ガ末孫ニ多田蔵人行綱ト云シ者ヲ召テ」(巻四―二四四ページ)としていた。施線の注記を付し、二重施線で満仲の子孫と慈円が明記したのは『治承物語』の文章に依拠しているからであつた。⁽²⁸⁾これと同質の注記が、源頼朝の挙兵の事象をめぐる『愚管抄』別帖の第八十一代安徳天皇の条にある。すなわち、

伊豆國ニ義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、世ノ事ヲフカク思テアリケリ。平治ノ乱二十三ニテ兵衛佐トテアリケルヲ、ソノ乱ハ十二月ナリ、正月ニ永曆ト改元アリケル二月九日、頼盛ガ郎等ニ右兵衛尉平宗清ト云者アリケルガ、モトメ出シテマイラセタリケル。コノ頼盛ガ母ト云ハ修理権大夫宗兼ガ女ナリ。イヒシラヌ程ノ女房ニテアリケルガ、夫ノ忠盛ヲモモタヘタル者ナリケルガ、保元ノ乱ニモ、頼盛ガ母ガ新院ノ一宮ヲヤシナヒマイラセケレバ、新院ノ御方ハマイルベキ者ニテ有ケルヲ、「コノ事ハ一定新院ノ御方ハマケナシズ。勝ベキヤウモナキ次第ナリ」トテ、「ヒシト兄ノ清盛ニツキテアレ」トオシヘテ有ケル。カヤウノ者ニテ、コノ頼朝ハアサマシクオサナクテ、イトオシキ氣シタル者ニテアリケルヲ、「アレガ頸ヲバイカバハ切ンズル。我ニユルサセ給ヘ」トナクくコヒウケテ、伊豆ハハ流刑ニ行ヒテケルナリ。物ノ始終ハ有レ興不思議ナリ。其時モカハル又打カヘシテ世ノヌシトナルベキ者ナリケレバニヤ、頼盛ヲモフカクタノミタル氣色ニ

テ有ケルナリケリ。コノ頼朝、コノ宮ノ宣旨ト云物ヲモテ来リケルヲ見テ、「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心オコリニケリ。又光能卿院ノ御氣色ヲミテ、文覚トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆ニ流サレタル上人アリキ。ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトカヤ。但コレハヒガ事ナリ。文覚・上覚・千覚トテグシテアルヒジリ流サレタリケル中、四年同ジ伊豆國ニテ朝夕ニ頼朝ニ馴タリケル、ソノ文覚、サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ、上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ。

(巻五——二五一—五二ページ)

と精彩を放つて詳述されている。波線部にあるように現今の治世を流刑地の伊豆から思いめぐらしていた頼朝は、次の波線部で以仁王の令旨を受け取つて「思つていたとおりだ」と吐露している。同時に配流されてより拳兵し、やがて平家一門を滅ぼしていくことで廟堂の秩序を回復させ、王法の安寧にすることで頼朝は「武者ノ世」の領導するとの慈円の道理史観の中核となる思念が宣揚されはじめている。それは『愚管抄』付録に於いて、第一代神武天皇より第八十二代後鳥羽天皇までの治世を全七期に区分して、その第五期を、

五、初ヨリ其儀両方ニワカレテヒシクト論ジテユリユクホドニ、サスガ二道理ハ一コソアレバ、其道理ヘイ、カチテヨコナフ道理ナリ。コレハ地體二道理ヲシルニハアラネド、シカルベクテ威徳アル人ノ主人ナル時ハコレ用ル道理也。コレハ武士ノ世ノ方ノ頼朝マデカ。

(巻七——三二五—三二六ページ)

と概括して、頼朝を二重施線にあるよう「威徳アル人」と評し、波線部では「主人」になるのが道理であると説諭しているからである。前掲した別帖の頼朝の拳兵をめぐる文章の二重施線「物ノ始終ハ有レ興不思議ナリ」の注記には、史論の本筋に頼朝を説き起こそうとする慈円の意図が籠っている。そうであるから、二重施線の「物ノ始終」の言辞には『治承物語』の顛末の骨子が同時に摘記されていることもある。したがって施線の「但コレハヒガ事ナリ」とは、文覚が旧知の院の近臣である光能を通じて院宣を得て拳兵した『治承物語』の内容を虚偽であるとの注記を施し、つづけて文覚が拳兵するように頼朝を教唆した実相を簡潔に慈円は併記したのであつ

た。そして、『愚管抄』別帖の後鳥羽天皇の在位する元暦二年(一一八五)三月二十四日にあった壇ノ浦の海戦で神器の宝剣・喪失に代替して武將頼朝を正面に据える。このことから平家一門を族滅させることで王法をささえる「今ハ武士將軍世ヲヒシト取テ、国王、武士大將軍ガ心ヲタガヘテハ、エヨハシマスマジキ時運」(巻五——二六五ページ)の到来との批評をした。頼朝の勝利を末代現今の「武者ノ世」の道理と把握するわけである。

『治承物語』の「鹿ヶ谷事件」の多田藏人行綱密告は、『愚管抄』の論理から頼朝のもとに届けた院宣と同様に史実ではなかったのである。

【未完】

註

〔1〕拙著「第七章 治承物語と西山の空間」・「第八章 治承物語の復元」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)

〔2〕註〔1〕の同書「第八章 治承物語の復元」・拙稿「『治承物語』の性格——西山と四天王寺」(『日本仏教総合研究』第一二号・二〇一四年)

〔3〕「鹿ヶ谷事件」考」(『立命館文学』第六二四号・二〇一二年一月)

〔4〕註〔1〕の同書「第八章 治承物語の復元」

〔5〕木村真美子「少納言入道信西の一族——僧籍の子息たち——」(『史論』第四五号・一九九二年三月)

〔6〕市古貞次「信西とその子孫」(『日本学士院紀要』第四二巻第三号・一九八八年一〇月)

〔7〕目崎徳衛『出家通世』(中央公論社・一九七六年)一一四ページ

〔8〕このことはすでに指摘されており、例えば美濃部重克も「いわば作者の政治観の代弁者となっていることはよく知られている。静賢は後白河院の近臣であって、しかも平重盛と同様の性格の人物とされている」としている(「平家物語の構成——鹿谷のプロット——」(『文学』第五六号・一九八八年三月))

〔9〕『平清盛と後白河院』(角川書店・二〇一四年)一二九〜一三〇ページ・一四五ページ

〔10〕註〔9〕の同書一一九ページ

〔11〕註〔4〕と同じ。

- 〔12〕 註〔8〕と同じ。
- 〔13〕 第二章 古態テクストの構成と視点¹⁾で作品を構成する個々の物語を「句」、プロットを有する知る小さい部分²⁾、「題材的要素・物語切片」として「個々の「部分」が、どのようなつながりを以て物語を構成して行くかを探るために必要な作業である。」と提言している。(『平家物語の成立』名古屋大学出版会・一九九三年 三四ページ)
- 〔14〕 註〔4〕と同じ。
- 〔15〕 大隅和雄(『愚管抄 現代語訳』講談社・二〇一二年) 二七七ページ
- 〔16〕 『古記』同年十二月十日条。
- 〔17〕 第二編 第一章 平家物語における摂関家の構図(『平家物語発生考』おうふう・一九九九年) 一二一〜一二二ページ
- 〔18〕 第八章 付録の文章について(『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年)
- 〔19〕 『延慶本平家物語全注釈 第二本(巻三)』(汲古書院・二〇〇七年) 四六二〜六三三ページ
- 〔20〕 「旧延慶本平家物語」の成立年代についての疑問(『名古屋大学国語国文学』第二九号・一九七一年二月)
- 〔21〕 註〔1〕の同書「第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家」
- 〔22〕 註〔1〕の同書「第十二章 屋代本平家物語の建礼門院の往生」
- 〔23〕 桜井好朗は「原平家の作者は慈円の考えに即して叙述をすすめた、と考えることができる。」としている。(『隠者と戦記―平家物語および太平記の成立に関して―』『中世日本人の思惟と表現』未来社・一九七〇年 一三三ページ)
- 〔24〕 註〔17〕で武久堅は「今ノ近衛入道殿下ノ御事也」は十分に基通生存中の文言であろうと私は推している。」としている(一三〇ページ)。が、註〔21〕で論じたように慈円へ「慈鎮」の諡号を贈り、吉水坊で追善供養した嘉禎三年(一二三三)の年から九条道家が主導して『治承物語』を六卷本へ再編して延慶本の祖本に近い本へととなっていた。同年には近衛基通の孫の兼経が道家の女仁子を妻にしている。したがって実相では、九条家と近衛家とが融和していく以上、近衛基通批判がなされている『愚管抄』をもとに、ごく最近の天福元年(一二三三)に死去した近衛基通を「生存」の認識ので把捉しても不自然ではあるまい。
- 〔25〕 註〔2〕の拙稿『治承物語』の性格―西山と四天王寺―
- 〔26〕 生駒孝臣「源頼政と以仁王―摂津源氏 門の宿命」(『治承く文治の内乱と鎌倉幕府の成立』清文堂・二〇一四年)
- 〔27〕 元木泰雄『源満仲・頼光』(ミネルヴァ書房・二〇〇四年 二九一ページ)
- 〔28〕 註〔21〕と同じ。

〔附記〕

本稿は拙著「第Ⅱ部 第八章 治承物語の復元」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)の節である「(三) 鹿ヶ谷事件と静賢」の延長線上に位置づけられるものであるが、さらに『治承物語』と六巻本『治承物語』との異同についても若干、言及した次第である。なお、本稿の〔引用資料の典拠〕は『治承物語』の藤原成親とその周辺「下」の末尾に一括して掲出する。